北医療薬会報

発　行　所　北海道石狩郡当別町金沢1757番地
北海道医療大学薬学部同窓会
☎(0133)23-0301　直通・FAX
☎(0133)23-1211　大学代表
発行人　桂　　正　俊

印　刷　所　㈱正文舎
札幌市白石区菊水２条１丁目４-27
☎(011)811-7151

本学　北方系生態観察園に生息するエゾリス（上）とモモンガ（下）

写真撮影・提供　薬学部 薬用植物園・北方系生態観察園　堀田　　清　准教授

目　　次

巻頭挨拶　同窓会副会長　斉藤　晃雄 …… 3

第39回　北医療薬　総会および医療薬学セミナーについて …… 4

定年退職される先生をご紹介します …… 4

定年退職される先生からのメッセージ
　　齊藤　浩司 教授　薬剤学講座（薬剤学） …… 5

新任教授からのご挨拶
　　柳川　芳毅 教授　薬理学講座（薬理学） …… 6

支部だより　十勝支部 …… 7

卒業生からの近況報告
　　第15期　薬理学教室　根本　昌宏 さん …… 8

2019年度オープンキャンパスのご案内 …… 10

第11期生卒業30周年記念祝賀会　秋野　光明 さん、野田　敏宏 さん …… 11

第３回　薬学部同窓会「卒業生・在校生合同懇談会」の報告 …… 12

北海道医療大学　同窓会コラボ☆講演会　第12弾について …… 12

訃報 …… 13

お知らせ（北医療薬 総会および懇親会のご案内） …… 14

編集後記 …… 14

巻 頭 挨 拶

「薬剤師という職能で今、出来ること」

北海道医療大学薬学部同窓会副会長
斉　藤　晃　雄

全国の北海道医療大学薬学部卒業生の皆様におかれましては、医療最先端の現場にて薬剤師として益々、ご活躍のこととお慶び申し上げます。私は10期卒の薬学部同窓会副会長の斉藤晃雄と申します。微力ではございますが同窓会発展のために全力を尽くして参りますので今後ともご支援・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。今、全国には薬剤師職能の方が約30万人います。毎年、私たちの後輩である新人薬剤師も１万人ほど輩出されてようやく充足されてきたと言われています。しかし現場では何年も前から常に薬剤師不足と言われ続けていて全国にどの程度の薬剤師数がいれば適正なのかよく議論になっています。現在、全国約30万人の薬剤師有資格者のうち、約22万人が薬局・病院で実働していますが、残り８万人の方は大学や行政、製薬会社等の職種に就いています。特に薬局勤務者の中にはパート勤務の方も多数含まれているので常勤薬剤師数としては常に不足傾向で、欠員のままの状態が何年も続いているので現場の方に過度な負担がかかっている現状です。又、薬剤師の都心部一極集中の傾向は特に偏りが強く地域偏在は今後益々、加速して解決策が探し出せない現況になっています。医師も全国で約30万人の方が医師職能に就いていますが同じ様な問題を抱えています。国民がこれからの薬剤師に期待することは自分のかかりつけの良き医療アドバイサーとして、いつでも気軽に健康相談に対応してくれることです。普段、薬局に勤務していると理解はしていても、どうしても目の前の業務に追われて処方箋に記載されている指示通りの薬を早く揃えて早く正確に渡すという作業が優先されてしまい本来の目指すべき薬剤師としての責務が出来ていません。これからはかかりつけ薬剤師としてまずは患者さんに信頼されて健康相談のアドバイサーとしていつでも気軽に相談相手になれる薬剤師が必要になります。薬剤師という職能を選んだ私たちに必要なのは患者さんの期待に応えられる専門的スキルを身に着ける為に自己研鑽する事です。ここ数年、認定薬剤師を目指す方が増えた為、研修認定シールが発行されるセミナーや研修会は常に満席になっています。薬剤師会はもとより北海道医療大学も数多くの生涯学習の機会を企画・実施しており、特に６年制を卒業した若い世代の皆さんの参加率が非常に高く運営する側の立場としては大変嬉しく思っております。認定薬剤師という制度がなかった数年前には空席が多い研修会、セミナーも多数あり開催に苦労したこともありました。これからも常にスキルアップを怠ることなくレベルの高い薬剤師を目指していきましょう。さて今年は７月に参議院選挙が実施されます。今まで参議院の薬剤師議員は藤井基之先生だけでしたので解散がなく任期６年間の為、今一つ盛り上がりに欠けていましたが、今回は現職２人目の薬剤師参議院議員を目指して全国比例区で女性薬剤師の本田あきこ氏が立候補を予定しております。言うまでもなく参議院議員は職能の代表として国会で意見を述べる事が出来ます。薬剤師の地位・給与や待遇も実はすべては国政の場で決まります。診療・調剤報酬は国が決めることなので仕方ないと思われている方も多いかもしれませんが、実は国政で意見を述べる事が出来るのが薬剤師参議院議員です。今回、初めて現職２人目の薬剤師参議院議員誕生を目指して本田あきこ氏が立候補を予定していますので私たちの生活を守るために18歳以上の在学中の薬学生と同窓生の皆様全員で一致団結して本田あきこ氏を応援しましょう。本田あきこ氏への応援のお願いを説明するために全道を訪問する機会がありますが、自分には関係ない・興味がない・選挙には行かないと言われる方が多いのも事実です。しかし参議院選挙は薬剤師職能の代表を選ぶ選挙なので自分た

ちの生活の質を向上するためと、これからの薬学部の後輩たち次世代薬剤師のために立ち上がらなければ絶対にならないのです。皆さんで応援していきましょう。又、とても嬉しい情報ですが2020年10月10～11日に22年ぶりに日本薬剤師会学術大会が北海道（札幌）で開催されます。地元での開催は私たちが薬剤師として働いている間には一生に１度程度しか開催されません。全国から約8,000名の方が北海道大会に参加する予定ですので、所属に関係なく私たち地元の薬剤師・薬学生全員で大会運営に積極的に参加協力して大成功させましょう。最後に今、世間からは薬剤師に対する厳しい風当り・評価・批判が続いています。社会的に責任ある仕事を任されている自覚を持って専門知識を更に身に付けて所属に関係なく団結力をより強化して、自分たちと次世代の薬剤師のために同窓生である私たちが今、動き出しましょう。

第39回　北医療薬
総会および医療薬学セミナーについて

平成30年７月14日（土）に北医療薬総会及び医療薬学セミナーが開催されました。医療薬学セミナーには講師として本学薬学部 衛生薬学講座（環境衛生学）准教授　遠藤哲也先生をお迎えし「頭髪成分分析による栄養状態の評価と医療への応用」と題し御講演を賜りました。遠藤先生のご研究は頭髪内に含まれる微量元素や同位体に着目したもので、体内に蓄積する重金属濃度の推定や微量元素分析による疾病診断への応用についてご紹介されました。近年の研究成果の１つとして、頭髪中の^{13}Cや^{15}Nの安定同位体比や微量金属元素量が、患者の栄養状態（飢餓、糖尿、中心静脈栄養など）を反映する「臨床栄養学的に優れた指標」となることを見出されました。また、大型魚類の海遊経路の違いが^{137}Csの生物濃縮に影響を与えることも明らかにされました。

講演終了後には懇親会が開催され、ご参加頂いた遠藤先生と活発な意見交換がなされ、大変盛況な会となりました。

定年退職される先生をご紹介します

平成31年３月をもちまして、齊藤　浩司　教授　薬剤学講座（薬剤学）が定年退職されました。平成31年２月25日に齊藤先生による最終講義が行われ、その後中央講義棟10階ラウンジにて退職記念祝賀会が行われました。北海道医療大学の薬学教育への多大なご貢献に心より感謝致します。

定年退職される先生からのメッセージ

北海道医療大学での23年に感謝を込めて

薬剤学講座（薬剤学）　齊　藤　浩　司 教授

1996年４月に、薬剤学研究室に助教授として迎えていただいてから23年の歳月が流れ、この３月に定年を迎えました。４月からは特任教授として引き続き教育に携わる機会をいただいております。昨年定年となられた和田先生、大倉先生、八木先生の勤続年数には遠く及びませんが、教職員の皆様や高田先生の薫陶を受けられた諸先生のご指導・ご支援をいただきながら、何とか定年まで職責を全うすることができました。またこの間、各地の同窓生の皆様には地区別懇談会や入試、医療薬学セミナーなどで大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

福島県いわき市で生まれ育った私が北海道に住んで45年以上経ちますが、北の大地での人生は北大受験のために初めて青函連絡船で津軽海峡を渡った時に始まりました。以来、当時就航していた羊蹄丸や摩周丸、十和田丸などに乗り、津軽海峡を幾度となく往復したときの情景が歌の歌詞そのままに今も懐かしく蘇ってきます。同窓生の皆さんの中にも、連絡船が出航する際のドラの音や「蛍の光」を聴きながら、学生時代に本州と北海道を行き来された方が多くいることと思います。

私が着任した当時は欧米に倣ってファーマシューティカル・ケアを実践する薬剤師の養成が大きな課題となり、各薬系大学が医療薬学教育の充実化を図る一環として学位を有する薬剤師が医療現場から何人も大学教員として転出しました。私が北大病院薬剤部から本学に採用されたのもその流れに沿ったもので、北大病院で一緒に仕事をしていた郡先生がその後北海道薬科大学に、井関先生が北大薬学部に移られています。北海道医療大学にとって私で良かったのかどうかはさておき、本学の一連の動きは間違いなく全国薬系大学の先駆けになっていたと思います。本学に来る話を当時薬剤部長だった宮崎勝巳先生から伺ったとき、それまで高田先生との接点がほとんどありませんでしたので、青天の霹靂のように驚いたのを覚えています。

着任した４月から私は「臨床薬剤学」という実務系の新しい講義を担当しました。教育経験がない身でいきなりでしたので自分の授業は大丈夫だろうかと自問自答の繰り返しでしたが、そのときの４年生たちが私の講義に熱心に耳を傾けてくれ、「とても分かりやすい」という感想をもらい、国家試験後には「最後の実務のところでばっちり点数取れたので合格できそう」と報告をもらい、それで少し自分の立ち位置が見えました。しかしながら、徐々に教員生活に慣れて教育への関わりが深くなると逆に教育の難しさを痛感することが多くなりました。また、講義中の話し方には十分注意していたつもりでしたが、授業評価アンケートが導入されてから、「言葉が訛っていて耳障りだ。標準語で講義をしろ。」などのコメントが何度か書き込まれ、かなり悩んだ時期もありました。そんな気分を転換させて前に進ませてくれたのが薬剤学研究室に在籍した学生や大学院生との様々な触れ合いでした。「たっぷの湯」での宿泊研修や当別「信長」でのどんちゃん騒ぎ、拙宅での枝豆パーティー /BBQなど、楽しい思い出は数えだしたら切りがありません。

私は1992年に北大病院を一旦退職し、２年４ヶ月米国のDuPont Merckという製薬企業に留学しました。この会社は、DuPontが開発したロサルタンをMerckの販売力で世に送り出すのを主目的に設立されたと聞きました。留学というと欧米の著名な教授の研究室に行くのが一般的ですので、私の場合はちょっと異例のケースでした。しかし、病院といういわゆる「育薬」の場にいた自分が「創薬」の場である製薬企業での研究に携わり、薬というものを両サイドから見る目を持つようになれたことは、その後の教員人生の大きな財産になりました。DuPont Merckでの研究を通してP－糖タンパク質が新薬開発の大きな障壁になること、そして薬物相互作用を引き起こす重大な要因になることを学び、本学着任後も引き続きこれに関連する研究を進めてきまし

た。P－糖タンパク質について今では薬剤師国家試験に当たり前のように出題されていますが、着任当時はその重要性を医療現場の先生方になかなか理解してもらえず、ずいぶん難しい話をする教員とみられたようです。薬学教育が４年制だった頃、薬剤学研究室には多くの大学院生が所属してくれました。まだ50歳前後で血気盛ん（？）な私の叱咤激励に耐えながら頑張って残してくれた研究成果は、私の生涯の宝です。その流れは６年制になっても卒業研究を通して受け継がれています。

私のかけがえのない恩師のお一人である高田昌彦先生は去る４月３日にご逝去されました。私が高田先生の下で助教授だったのはわずか２年と短いものでしたが、この２年の間に高田先生と交わした会話の一つ一つが、その後20年間教授職を務める上での大きな指標になりました。感謝の念に堪えず、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。懐かしい思い出として、正月にご自宅に伺って４名の１期卒業生の皆さん（お名前はあえて伏せますが）と共に高田先生秘蔵の日本酒を次々に飲みまくって全員前後不覚になり先生と奥様に大変なご迷惑をお掛けしたこと、高田先生ご夫妻と当時助手だった小田雅子先生、川崎直子先生の５人でボストンで開催されたAAPSという国際会議に行った際に行きも帰りも飛行機トラブルに遭い大変な目に合ったことなどが真っ先に浮かんできます。

これからの医療現場にはAIが様々な形で導入され、それに伴って薬剤師業務にも大きな変革が間違いなく起こりそうです。存在自体が問われる局面が出てくるかも知れません。同窓生の皆様にはそんな中でも決して自分を見失うことなく、人間薬剤師に求められる職能の構築に邁進して行かれることを衷心より願っております。

薬学部には新しい先生が次々に加わるようになり、私と同年代の先生を第二世代とすれば、徐々に第三世代の時代へと移りつつあります。若い先生方には日本の薬学教育の最先端を進む薬学部の創造をめざして持てる力を大いに発揮してくれることと思います。それを底辺で支えてくれるのが同窓生の皆様の暖かく時には厳しい、そして絶え間ないご支援です。全国的に見ても同窓会組織がしっかりしている薬系大学は存在感が違います(本学もそうです)。北海道医療大学薬学部同窓会が強い結束の下に更なる発展を遂げられ、本学薬学部の歴史が連綿と積み上げられて行くことを祈念しております。

最後の海外出張(AAPS Annual Meeting、サンディエゴ、2014年)
左から、齊藤、小田先生、市村先生

新任教授からのご挨拶

教授就任にあたって

薬理学講座（薬理学）　柳　川　芳　毅 教授

この度、2018年11月１日付で薬理学講座（薬理学）の教授を拝命致しました。薬学部同窓会の皆様に新任のご挨拶を申し上げます。

私は1991年３月に北海道大学薬学部を卒業し1993年３月に同大学院薬学研究科修士課程を修了しました。その後1993年４月から吉富製薬株式会社（現田辺三菱製薬）薬理研究チームの研究員として、移植片拒絶や自己免疫疾患の病態メカニズムに着目した創薬研究を行いました。入社まもなく千葉健治主席研究員が統括する新規免疫抑制薬（開発コード：FTY720）開発プロジェクトの一員に抜擢され、FTY720作用機序の解明を担当させて頂きました。その結果、FTY720がＴ細胞をリンパ

節に閉じこめることによって免疫抑制作用を発揮することを明らかにしました。この知見は免疫抑制薬の常識を覆すもので、これに関する２編の論文は今もなお多くの学術誌に引用されています。FTY720は欧米での臨床試験を経て日本においても2011年より自己免疫疾患の一つである多発性硬化症の治療薬として承認されています(一般名：フィンゴリモド、商品名：イムセラ/ジレニア)。フィンゴリモドの社会的ニーズは高く、発売２年目にしてブロックバスター（年間の売り上げが10億ドルを超える医薬品）の仲間入りを果たしました。

フィンゴリモドの創薬研究が成功したのは、このプロジェクトを統括していた千葉さんの神がかり的な創造力、直観力、判断力によるもので、画期的な新薬というものはこういった「天才」によって生まれるものだと知りました。千葉さんのもとで創薬研究に従事した経験は、私の研究人生において貴重な財産であると確信しています。

製薬会社での研究は順調でしたが、アカデミックなポジションで力量を試したいという欲に駆られ、2000年５月より北海道大学遺伝子病制御研究所の助手（助教）として基礎医学（免疫学）の研究に従事することとなりました。当時、遺伝子病制御研究所の所長をされていた小野江和則先生のもとで、免疫学における最先端の研究を思う存分行うことができました。ここでは、創薬研究とは異なった基礎研究の面白さと難しさを実感しました。

私としては、薬学部出身であることから、いずれ薬学部に戻り、これまでの経験を薬学教育に生かしたいという思いがありました。そんな中ご縁を頂き2009年４月に本学薬学部、薬理学講座(病態生理学)の教員として採用され、講師・准教授として薬学教育研究に携わり、2019年11月より現職を務めさせて頂いております。

昨今では少子高齢化の中、薬学部志願者数は年々減少する傾向にあります。その一方で医療現場における薬剤師の必要性は増す一方であります。そういった社会情勢の中、薬剤師になることを希望し本学に入学してきた学生たちを、熱意をもってしっかりと教育し、薬剤師国家試験に合格させることが、私共の最も優先すべき責務であると心得ております。同窓会の皆様におかれましては、本学卒業生を実際の医療現場においてより一層社会的ニーズの高い薬剤師へと導いていただければ幸いです。本学と同窓会が連携して育成した人材が、地域医療に貢献し信頼される薬剤師になることは、本学薬学部志願者の増加へとつながり、さらには本同窓会の発展に寄与するものと拝察いたします。最後に皆様の益々のご活躍とご健勝を祈念してご挨拶とさせていただきます。

支部だより（十勝支部の紹介）

回想十勝支部

北海道医療大学薬学部同窓会　十勝支部　支部長　石　原　　敦（いしはら薬局）

十勝支部は、平成９年７月12日に設立され一期生中村章先生が支部長となられ支部事業を行ってきました。

どのようにすることで会員の先生が出席しやすいのか、多くの先生のご意見を頂き、交流会と名称を変え心おきなく意見を交換できる場を提供することを第一目的として装いも新たに現在行っております。

今年度は交流会として再開して３回目となりましたが、会員の皆さんから十勝で医療薬学セミナーを開催してはと提案がなされ、講師として本学薬学部実務薬学講座 中山　章 先生をお迎えしました。

ここ数年の間に、交流会を行う中でお亡くなりになっている先生がおられることがわかりました。鈴木ゆかり先生（昭和58年卒）、家常智美先生（平成19年卒）がご逝去されております。さらに、平成29年２月支部役員としてご活躍されておりました紺野賢二先生（昭和61年卒）、本年２月内山一弥先生（昭和53年卒）がご逝去されました。ご報告申し上げますとともに、謹んで心よりご冥福をお祈りしたいと思います。

自らの学生時代を振り返れば昭和51年に東日本学園大学（現在は北海道医療大学）に入学、音別での学生生活が始まりました。音別という大自然の中での寮生活、様々な思い出がありました。本大学が長い歴史を重ねている中で亡くなられた同窓生に改めて思いを馳せております。

時代は、昭和、平成そして令和へと大きく流れ、移行しています。大きく様変わりする薬剤師の環境の中で皆様のご協力を頂き、同窓生という絆をより深められる薬学部同窓会十勝支部になるよう切に願い、ご報告といたします。

卒業生からの近況報告

第15期　薬理学教室　根　本　昌　宏さん

皆様、こんにちは。私は北見市にある日本赤十字北海道看護大学に勤務している根本昌宏と申します。大学では看護薬理学領域という生化学、薬理学と統計学を扱う領域の教授として仕事をしながら、大学に設立されている災害対策教育センターの責任者を務めさせていただいております。薬理学と寒冷地防災学という２足のわらじを履いて仕事を進めています。

まず、最初にお伝えしたいことがあります。現在の私があるのは、多くのご指導と出会いの場をいただいた恩師のおかげです。特に、学部、修士ならびに博士課程でお世話になった南先生、門間先生、平藤先生、遠藤先生、浜上先生。現在の私の仕事の基礎となる研究の進め方、捉え方そして公表することの重要性について熱心にご指導いただき､「チーム」として研究成果を追い求めることの意義と、次の世代（後輩）につなぐことの大切さを体感させていただきました。研究活動というと孤独になりがちですが、私の在籍していた15期前後の薬理学教室は孤独とは無縁の「極めて」にぎやかな講座で、いつもあの当時を懐かしく思い出します。薬理学教室繋がりで、千葉にある日本メジフィジックスに就職し、薬理学部門の担当となったときには、12期の柳井先輩に公私ともに本当にお世話になりました。今でこそ当たり前になったPET製剤（FDG）も担当させていただき、薬理学教室で得た技術をそのまま仕事に活かすことができたことは何よりの喜びでした。

「北海道に戻りたい」という気持ちが心のどこかにあり、研究所に在籍して４年目に結婚と同時に転職というアクロバティックな時系列を経て、小樽市にある朝里調剤薬局において、貴重な薬剤師の経験を積ませていただいたのは、相馬先生、10期の佐々木先生です。おくすり手帳の草分けである相馬先生の下で、患者さんへ薬剤情報を伝えるためには自分がその数百倍知識を持たねばならないことを学びました。わずか１年の薬局勤務でしたが、この経験がなければ今の薬理学としての教員もままならなかったと思います。

私自身、大学教員になることなど夢にも思っておりませんでしたが、1999年、日本赤十字北海道看護大学の開学に伴い、薬理学の教授として就任された元北大の齋藤先生の助手として着任させていただきました。齋藤先生のご指導により、大学における研究と教育の道を拓いていただいたことが、今に繋がっています。助手の仕事の傍ら、北見から当別に通う社会人博士課程の研究はとても大変でしたが、その苦労は何百倍にもなって、今、私に還元されてきています。先生方との必然の出会いがなければ、今の私はありません。私の人生を形作っていただき、本当に感謝しております。

さて、私の現在について少しお伝えさせていただきます。薬理学、生化学の教員としての仕事とともに、赤十字の大学というメリットを活かして2009年より災害対策、とくに寒冷地災害に特化した研究を進めています。毎年１月に「厳冬期災害演習」というものが開かれていることは、新聞やテレビ等でご覧になった方も多いのではないかと思います。時事通信さんの私の記事を検索していただくと、事の経緯がご理解いただけます。

時事ドットコム（https://www.jiji.com/jc/v4?id=201503midwinterdisaster0001）

４年前のこの時点では、私は冬の避難所は開設自体が無理だと思っていました。事実、道内の自治体さんも冬の計画はほぼ皆無でした。氷点下10℃を下回る外気温では「停電」「無暖房」で低体温症の発症が危惧されていたからです。この時事通信さんの取材を受けた日は、私にとって大きなブレークスルーの日でもありました。日本集団災害医学会（現在は日本災害医学会）が東京で行われており、その発表の場で偶然段ボールベッドを開発した水谷さんと出会えたのです。2011年の東日本大震災において開発されたこの資材が存在していることは認知していましたが、実物はこの2015年３月まで目にしていませんでした。段ボールが温かい素材であることはなんとなく分かりますが、実際にどの位の保温性を有するのかは未知数であり、早速水谷さんと段ボールベッドの保温性能に関する共同研究を進めました。2016年１月に実施した厳冬期演習では屋外気温がマイナス16℃となる中で、参加者のほとんどが就寝可能、うち２割は熟睡という成果が得られ、「気温」をあげる暖房に注力するよりも、「寝床を保温」する重要性が浮かび上がり、冬の避難所計画に一筋の明かりが見えました。実際に、段ボールベッドの表面は床面よりも体感で15℃ほど温かくなります。キャンプなどで使う布製ベッドや折り畳みベッドは、この温度には遠く届きません。また、温かさだけでなく床を歩く音、床面を這う風、ほこり等からも身を護り、さらに段ボールは空箱ですので着替えや貴重品などの収納として機能します。起き上がりやすくなることはエコノミークラス症候群の予防に直結します。この結果を踏まえて、日本赤十字北海道看護大学は2018年１月までに、日本で唯一、450台もの段ボールベッドを「研究用」として備蓄を進めていました。

2018年９月６日午前３時７分59秒。北海道の地が震度７に襲われました。前日は台風21号の影響を受け、新千歳空港と札幌とを結ぶJRが運休する事態の直後で、私も会議のため札幌におり、市内の某ホテルの８階で就寝していたところを襲われ、呆然となりました。偶然札幌にいたことを最大限生かすために、日本赤十字社ならびに北海道庁にお邪魔をし、段ボールベッドの整備について日本最速のオペレーションを進めました。またNHK札幌局への出演で災害関連疾患について啓発させていただき、９月８日からほぼ２週間は現地対応をさせていただきました。この胆振東部地震への対応では、北海道薬剤師会から派遣されていた桂先生、北見の越智先生とも現地でお会いしました。また、時を同じくして北海道医療大学歯学部の越野教授をはじめとする歯科医療チームとお話をさせていただき、災害時の口腔衛生の重要性を改めて認識し、災害対策にまだまだ改善すべき余地があることを感じておりました。

私は薬剤業務に専従されている先生方のような災害医療に対応することはできません。しかし、災害時の生活というのは、人として生きるためのすべての要素がかなえられてなければならず、何か一つでも欠けると「我慢」の世界へと入ってしまいます。ここで重要なことは災害保健もしくは災害公衆衛生だと考えています。病んでいる人を診る災害医療から、人が病まないように健康を保持する予防医療へのシフトが、日本の災害対策に求められています。そのために必要な人たちの基本は、「専門職能」です。普段お仕事をされているその分野の事案を、災害時においても発揮していただく。在宅・訪問医療に従事されている先生の中でも、特にケアマネとしてご活躍されている先生には、災害時に最大限のお力を発揮していただきたい。自主防災組織などとともに、顔の見える関係が構築されている地域は間違いなく災害に強く、かつそこからの復興（レジリエンス）を早くします。

北海道医療大学の教育理念に「個人の尊厳」が挙げられております。災害大国日本において、災害の厳しい現場においても人の尊厳が守られる仕組みが形作られることを願い、薬学の立ち位置からさらなる対策を考えていきたいと思います。

2019年度オープンキャンパスのご案内

今年度も北海道医療大学オープンキャンパスが開催されます。
（歯学部附属歯科衛生士専門学校も同日開催）

日時

６月16日（日）学校祭同日開催！
８月３日（土）
８月４日（日）
９月21日（土）　※いずれの日程も11：00～16：00まで

内容

●大学概要説明
2019年度入試結果及び2020年度入試概要について説明を行います。

●在学生による学科紹介やトーク
学生からみた本学の特色を紹介します。

●学内施設見学
興味のある学部・学科に分かれて施設見学を行います。

●体験実習または模擬講義
興味のある学部・学科に分かれて行います。

●保護者ガイダンス

●個別進学相談

※ランチ付き
JR札幌駅より無料送迎バス運行

オープンキャンパスに関するお問い合わせは入試広報課まで
フリーダイヤル：0120−068−222
E-mail: nyushi@hoku-iryo-u.ac.jp
特設サイト：https://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~koho/opencampus/

第11期生卒業30周年記念祝賀会

「卒業後30周年（第11期）同窓会を終えて」

第11期　秋野　光明 さん、野田　敏宏 さん

昨年７月15日に京王プラザホテル札幌において、北海道医療大学（前：東日本学園大学）薬学部11期生卒業30周年記念同窓会を開催しました。ベストシーズンと言われる７月の北海道。色とりどりの花々が街を飾り、見どころが満載の札幌で、卒業後30年を記念する同窓会ならびに祝賀会を行うことができました。参加者は46名､遠くは石川県､山梨県、愛知県からと仲間たちが集まりました。

本会が無事に終了した今だから言えますが、開催するまでの準備、それはそれは正直、大変でした。幹事代表の秋野が東京、野田は旭川、二人とも札幌に住んではいないという状況。そんな中、私たちを助けてくれたのが、小室さんでした。先輩から引き継いだ資料を参考にし、同窓会の協力も得ながらの名簿作成。葉書による事前通知、連絡先が不明な同窓生の情報収集、参加状況の集計と返信葉書が返送されていない同窓生への出欠確認。式の当日に上映する思い出スライドの写真集めとその編集作業。メールやSNSを駆使しながら準備を進めました。当日の式の進行及び会場設営について、ホテル側との打ち合わせも幾度か繰り返しました｡式の当日には、札沼線に乗り、現在の大学キャンパス（当別町）を見学するツアーも計画、その準備や当日の役割分担にも頭を悩ませました。

迎えた当日、前述したこれまでの苦労がいっきに吹き飛びました。仲間達の顔を見られたからです。学生時代の想い出が、頭の中を走馬灯のように駆けめぐりました。卒業後に初めて会う友もいました。ガリガリだった学生の頃の体形が大きく変わった友（男性）もいました。妻を伴い参加してくれた悪友もいました。沖縄の友人達は、泡盛を添えたビデオメッセージを送ってくれました。30年振りの再会に多少の不安を抱きながらも参加された友もいました。亡き友に関する悲しい知らせも届きました。30年間という重みを語るには、あまりに短い時間でした。音別町の寮生活の話題にも話が尽きませんでした。誰一人欠けることなく二次会へと移行し、三次会、四次会へと、その時間が過ぎていきました。楽しい時は、あっという間に過ぎさることを、あらためて痛感させられた一日でもありました。

学生当時にお世話になった先生方や関係者の方々にも参加していただけたら、少しは成長した我々から、改めて感謝の意をお伝えできたことでしょう。

次回は還暦の会として、10年後に再会することを誓い、名残惜しく会を終えました。本校の第１期生から続いている卒業後30年の記念会は、後輩たちへとその絆のバトンをつなぎます。母校並びに薬学部同窓会のさらなる発展と飛躍を願って。

第３回　薬学部同窓会「卒業生・在校生合同懇談会」の報告

薬学部同窓会主催の第３回卒業生・在校生合同懇談会がANAクラウンプラザホテル札幌にて令和元年５月24日（金）に開催されました。この会は、在校生と卒業生が交流することで、就職や実際の仕事に関する認識を深めるとともに、悩みや不安を話し、相談する機会を提供するという趣旨のもとに企画され、今年が３回目の開催となります。

当日は在校生（４～６年生）78名、卒業生51名、同窓会役員・学内職員24名、計153名の参加があり、交流を深めることができました。

桂 正俊 同窓会会長(12期)にご挨拶をいただき、斉藤晃雄 同窓会副会長（10期）の乾杯のご挨拶と共に合同懇談会が始まりました。卒業生のネームストラップの色を職種毎に変え、病院は赤色、薬局は青色、企業は緑色とし、在校生は希望職種の卒業生を囲み、積極的に情報収集をしていました。

実際に現場で働いている先輩たちの生の声を聞くことができた当懇談会は、在校生にとって、有意義な場になったと思われます。

最後は、井藤達也 同窓会副会長（13期）によるご挨拶と中締めで盛会のうちにお開きとなりました。次年度も参加者にとって有意義な会になるように、理事会等で開催要綱が検討される予定です。

北海道医療大学 同窓会コラボ☆講演会　第12弾について

平成31年３月９日14時より、北海道医療大学生涯研修事業専門職向け講座　同窓会コラボ☆講演会第12弾が開催されました。今年の講演は、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科　老化制御学系口腔老化制御学分野准教授　戸原　玄（とはらはるか）先生をお招きし、「摂食・嚥下障害の評価と訓練の実際」と題しまして、嚥下評価や訓練方法についてエビデンスだけでなく実施の工夫など幅広い内容について約３時間ご講演いただきました。また、診療上の対応や工夫について活発な質疑応答が行われました。参加者数は定員200名を超え、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、言語聴覚士、歯科衛生士、栄養士、柔道整復師など様々な職種の方にご来場いただきました。講演会後、戸原先生やご来賓を囲み懇親会を開き、戸原先生に実行委員会からの感謝状を贈呈しました。

本講演会は、北海道医療大学の各同窓会が合同で大学と共同して企画運営に携わる講演会として、『口から食べられる理想に向かって』をメインテーマに掲げて毎年開催されており、今回で第12回目の開催になります。実行委員長は同窓会持ち回りで担当しており、本年度は北医療薬会長　桂　正俊　先

生が担われました。次年度も３月上旬に開催を予定しておりますので、ご興味のおありになる先生はぜひ同窓会コラボ☆講演会ホームページ（https://hokuiryoudaidousou.jimdo.com/）、または北海道医療大学生涯学習事業サイトやパンフレット（後期分）をご覧いただけますと幸いです。

訃　報

北海道医療大学名誉教授　高田昌彦先生が（病気療養中のところ）平成31年４月３日にご逝去されました。ご葬儀はご親族で家族葬にて執り行われましたが、武田　清孝先生（薬剤学講座同門会会長）を実行委員長として、『高田昌彦先生お別れの会』が令和元年５月11日（土）午後１時より『やわらぎ斎場センティア28』にて挙行され、240名ほどの諸先生、卒業生の方々が参列されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

第40回 北医療薬 総会および懇親会のご案内
(医療薬学セミナーのご案内)

第40回北海道医療大学薬学部同窓会総会および懇親会を下記のとおり開催いたします。総会は同窓会発展のために皆様からのご意見を頂戴し、活動方針について審議いただく貴重な機会です。多くの皆様にご参加いただき、ご意見を賜りながら、親睦を深めていただきたく思います。是非、お誘い合わせのうえ奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

総会終了後、齊藤　浩司先生を講師に迎え医療薬学セミナー（札幌支部主催）を開催いたします。

記

日　時：2019年７月27日（土）

【北医療薬　総会】　16時00分

【札幌支部　総会】　17時00分（札幌支部会員）

【医療薬学セミナー】17時30分

北海道医療大学薬学部　教授　齊藤　浩司 先生

「CKD患者における薬物動態変化と尿毒症物質」

＊札幌支部主催ですが、どなたでもご参加いただけます。

＊北海道医療大学薬剤師支援センター認定研修（１単位）です。

受講シール交付にあたり、薬剤師免許証番号を記載していただきます。

（交付方法が変わりました。）

【懇親会】19時00分（セミナー終了後）

会　費：3,000円（当日申し受けます）

会　場：ANAクラウンプラザホテル札幌

札幌市中央区北３条西１丁目　　TEL（011）242-1885

＊出欠席のご回答は、同窓会ホームページ（北海道医療大学 → 薬学部 → 同窓会）で７月15日までにお知らせください。

同窓会ホームページ：http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/

※はがきでの受付は行いません。

お問い合せ：dosoyaku@hoku-iryo-u.ac.jp

編集後記

本学北方系生態観察園にはエゾリスとモモンガが生息しているそうです(表紙写真)。愛くるしいながらも寒さ厳しい当別の地でたくましく生きる姿に未来の若者たちがダブります。学生諸君もたくましくなって本学を巣立つことでしょう。　(S.K.)